日本中国語学会々報　2014年6月

http://www.chilin.jp/

◆目次◆

ご挨拶 1
支部例会実施報告　2014.1-2014.5 2
会議報告 6
全国大会および例会開催のお知らせ 10
事務局からのお願いとお知らせ 11

ご挨拶

太田　斎（日本中国語学会会長）

大会開催校の推移に似て、日本中国語学会の事務局は、今度は関東の早稲田大学から関西の神戸市外国語大学に移って来ることとなりました。これまでの歴代会長のご尽力で大きな懸案事項はほぼ解決済みかと思いますので、事務能力にかなり難のある身としては、それが救いです。幸い幹事を同じ神戸外大の専任教員で固めることができ、有能な理事及びその他の役員の方々にも恵まれましたので、こんな会長でも何とか事務局の体を為し、二年間の任を全うできるかなと思っております。些か頼りない会長ではありますが、微力を尽くして参りますので、どうかよろしくお願い申し上げます。

私事に亘りますが、神戸外大ではかつて本学会のメンバーとして活躍された太田辰夫、長田夏樹両先生らが教鞭をとられ、その蔵書の一部が図書館に寄贈されており、実際に手に取って見る機会がありました。その中には当時のまだ中国語学研究会と称していた頃の会誌がありました。ガリ版刷（今の若い方はピンとこないかもしれませんね）で、鉄筆で鑢盤（ヤスリみたいな板）の上に載せた蝋紙に文字を書くという、本当にやり直しの利かない作業で作成されたもので、酸化して茶色に変色した現物を見るとその頃の先学たちの熱気が伝わって来て、頭が下がる思いです。

振り返れば、中国語学会は 1946 年に中国語学研究会として発足、それから間もなく 70 周年になろうとしています。今はネットを活用して研究ができる便利な時代になりましたが、体系だった知識という点で、一人の研究者としてどこまで先学のレベルに近づいたのでしょう。もちろん時代と共に知のあり方は変わるものですし、現代においては学問の細分化が進み、先学の全人格的な研究の仕方を真似することはほとんど不可能です。そのような細分化によって長足の進歩を遂げた分野も確かにありますが、それでも我々は先学に虚心に学ぶ必要があるのではないかと、酸化して触るとすぐに千切れてしまいそうな会誌を手に痛感した次第です。全国大会や支部例会がこのような垣根を取り壊す機会になることを期待します。

会長に就任してまだ日が浅いのですが、早くも各支部からは例会通知のウェブ掲載のお

申し出が次々と舞い込んでおり、今年度の活動も例年同様に活発に行われていることが見て取れます。また、70 周年の刊行に向けて辞典編纂委員会の作業も着々と進んでおります。『中国語学事典』(1957-58 年）と『中国語学新辞典』(1969 年）から日本の中国語研究はどこまで進んだのか、それが会員の皆様のご尽力で明らかになる日がまもなくやって来ます。事務局としては、このような活動がより円滑に行われるべく、裏方として積極的にサポートしていく所存でおりますので、皆様にもどうかご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

支部例会実施報告　2014.1-2014.5

◆北海道支部例会

◇2014 年 3 月 15 日（土）北海道大学

・ 根岸美聡（北海道大学・院）：浙江臨海方言のアスペクト表現

本発表では、呉語に属する臨海方言におけるアスペクト的機能を有する機能語を研究対象として、①発表者の調査データに基づき臨海方言のアスペクト体系を整理・紹介した上で、②そのうち〈実現相〉を表すとも言うべき“爻”、“□[lɔʔ]”の具体的な意味機能について、標準中国語の“了”、“着”などと対照しつつ、前項動詞の意味特徴や文の事象構造といった観点を踏まえた分析を加えることを試みる。本発表の分析を通じて、広義の実現相についての臨海方言と標準中国語との機能分担の相違を明らかにすることを目的とする。

・ 山田大輔（北海道大学・院）：上古漢語における“也”の機能について

上古漢語における“也”の機能については、馬建忠（1898）以来、一般的には、文末に用いられるものは「判断」を表し、文中に用いられるものは「停頓」を表すとされている。しかしながら、「判断」では説明できない用例が数多くあり、「停頓」では文末に用いられるものとの関係が明らかにならない。近年では、「新情報」「焦点情報」といった観点から、文末、文中の“也”を統一的に説明しようとする研究がいくつか出されているが、“也”の機能はまだ十分には明らかになっていないと思われる。本発表では、“也”が用いられている語用論的条件を考慮して用例を整理･分析し、新たな仮説を提示する。

・ 羅沢宇（北海道大学・院）：外语接触对母语影响的过程与相关因素分析

本次报告主要报告笔者开始于 2011 年的一项调查（[关于汉语使用情况的调查] a、b）的内容和主要结果。该调查主要目的是为了揭示接触外语（L2，本调查中为日语）是否会对自己母语（L1，本调查中为汉语）产生影响、如果有那会产生怎样的影响、哪些方面影响多一些、个体的不同属性在其中又呈现什么样的差异。调查结果首先肯定了影响的存在，也证实了影响的范围和深度与语言结构以及个人的不同属性有一定联系。在报告调查结果的同时，还会结合另一项与该调查有关的汉语使用意识方面的访问调查数据，来综合地讨论外语的接触对母语产生影响过程中的各个方面。

・ 時崎久夫（札幌大学）：中国語の主要部補部の語順と音韻

本発表では、中国語の主要部補部の語順と音韻が相関していることを述べ、この相関が世界の言語に普遍的であることから、言語の音韻的な違いが

語順を決定しているという仮説を示し、その妥当性を検討したい。橋本（1978）は、中国語の方言が地理的および歴史的に音韻と統語の段階的変化を示していることを論じた。本研究では、変調と軽声に着目して、これらが主要部と補部の語順と相関していることを述べる。さらに、統語的に最も深い位置にある補部が変調と軽声化を受けないという一般化を示し、これは、最深部強勢（Cinque 1993）に通じる世界の言語に普遍的な音韻と統語の関係であることを述べたい。

◆関東支部例会

◇2014 年 3 月 15 日（土）早稲田大学

・ 邵永海（日本大学／北京大学）：先秦汉语中的“此”和“是”

先秦汉语中，“此”和“是”是两个重要的指示代词。《马氏文通》指出：“至‘是’‘此’二字，确有不可互易之处。凡指前文事理，不必历陈目前，而为心中可意者，即以‘是’字指之；前文事物有形可迹，且为近而可指者，以‘此’字指之。”此后学者作过深入探讨；但二者之间的异同关系始终不能说得很清楚。本文首先仔细描写了“此”和“是”在先秦重要文献中的句法表现，分析“此”和“是”在句法功能和语篇功能上的特征，从而对二者的差异提出了新的证据，希望对解释上古汉语代词系统繁复的原因有所贡献。

・ 大野広之（慶應義塾大学・非）：『眞言集』にみられる真言陀羅尼対音表記についての一考察―不動明王より始まる十三佛真言を出発点として―

本発表では、2012 年度関東支部例会発表にて今後の課題としておいた考察事項の一つである『眞言集』について取り上げていく。その中でも、日本では十三佛信仰として一般に知られる真言について、不動明王から順を追って検討する。『大蔵全咒』所収の真言陀羅尼については中途ながらも考察を続けてきたところではあるが、漢語周辺諸民族言語による対音表記といえば朝鮮語についても漢伝仏教伝播の過程を踏まえると考察の要は避けられないであろう。当面の間は、国内所蔵の言語資料に限られるが、漢訳仏典表記（大正經）との比較を基軸としていくことにしたい。

・ 王春玲（早稲田大学／西南大学）：四川西充话的“过成”、“过”

四川西充话的“过成”、“过”须黏附于动词性成分前，构成“过成/过+NP+VP”结构，表示说话人针对某一事物或事件，强调选取某种动作行为方式。“过成/过+VP”中，当 VP 是以光杆动词形式作谓语时，“过成”、“过”有成句作用，反之，“过成”、“过”则可自由隐现，但句子在语义层面有变化。“过成”、“过”和介词“弄”可共现或连用，构成“过成/过+弄+NP+VP”、“弄+NP+过成/过+VP”结构。“过”的来源：由连动式“过+NP（+来）+VP”发生重新分析，变成了状动式，“过”语法化为工具介词。

・ 林愷胤（東京大学・院）：台湾語“共”の歴史変遷

現代台湾語における“共”の用法には目標、受益者、被動者、起点、処置式を表すものがある。台湾語・閩南語の“共”の文法化過程については今に至るまでまとまった結論がない。本研究では、歴史文献、他方言の調査なども使って“共”の文法化過程を明らかにしたい。上古中国語から現代台湾語までの変遷は以下の通り：①動詞→②随伴を表す前置詞→③随伴を表す接続詞。このうち②から「起点を表す“共”」が生じ、③から「目標を表す“共”」、更に「受益者を表す“共”」が生じた。「目標を表す“共”」からは「被動者を表す“共”」が生じ、更に「処置式を表す“共”」が生じた。処置式の生成年代は 19 世紀末から 20 世紀初め頃と推定される。

◆北陸支部例会

◇2014 年 2 月 22 日（土）石川四高記念文化交流館

・金萍（金沢大学・院）：是…的構文における VO 的と V 的 O ——コーパスを利用した用法分析

動詞を含む“是…的”構文には、二種類の形式“S 是 VO 的“（「VO 的文」と呼ぶ）と“S 是 V 的 O”（「V 的 O 文」と呼ぶ）がある。本稿では、「VO 的文」と「V 的 O 文」の異同を明らかにするために、コーパス ccl から用例を無作為抽出して分析対象とした。使用数は「VO 的文」に比べ「V 的 O 文」のほうが約 3 倍あるが、両形式の「終結性」（終止法と中止法）の比率には大きな違いがみられなかった。また、両形式の交替状況について、ある種の助動詞を挿入した場合、両構文は全く変換できないが、ある種の副詞を挿入した場合、「VO 的文」から「V 的 O 文」へ変換できる例が少し現れる。その文脈分析の結果により、本稿では両構文の交替条件には発話者の発話内容の主観性が大きく関わると仮定し、その実証を試みる。

・王玉（金沢学院大学）：All-match 動詞——「弄」と「get」の比較

中国語には「弄」という all-match 動詞がある。英語では「get」が all-match 動詞だと言われている。小論は「弄」と「get」をもとに基本文型、活用文型(頻繁に使われているフレーズを含む文型）、そして口語（会話体）の 3 つのレベルにおいて中国語と英語の用例を比較し、両者の共通部分と相違部分を指摘しつつ、中国語と英語の文構造特徴を簡潔に分析する。また、「get」を「不完全動詞」とする英語の用法と、「弄」を含む「動詞補語構造」の用法を例示しながら議論を展開し、英語の基礎的能力を有している日本人中国語学習者に対して、中国語 all-match 動詞の新しい学習方法を提案する。

・玉源あい（金沢大学・院）：比較文の同定・比定・比喩 3 タイプ——カイ二乗検定による日中対照研究

本稿では、中国語と日本語の同程度比較文において、①同定、②比定、③比喩の 3 タイプを区別する。そのうえで本稿は、日中対訳コーパスを用いて、3 タイプの比較文の日本語と中国語における用いられ方を対照しつつ考察する。考察順序はまず、中国語と日本語における 3 タイプの典型的表現を指定し、その出現数をカイ二乗検定により比較し、比較文の選択方法の差異を分析する。なお、この対照研究が成立する根拠は認知言語学の視点から提供される。即ち「原文とその対訳」は言語表現の Base（背景的要素）を同じくするゆえに、タイプを同じくする profile の使用率を比較することができる。

・王燕（北陸大学孔子学院・未来創造学部）：中国人日本語学習者における日中名詞述語文習得の問題点

日本語には、意味的に動作や状態を表す「彼は今留守です。」のような「名詞述語文」が発達している。通常、「東京は日本の首都です。」のような日本語は“东京是日本的首都。”のように、“～是～。”を用いて訳される。しかし、この対応関係から外れた名詞述語文の習得は見過ごされてきた。そのため、日本語学習者は、中国語の発想に邪魔されて、なかなか名詞述語文の使用に思いつかない。日本語の名詞は動詞と形容詞と異なり、活用形がないため、名詞述語文の指導は初級段階からの導入が可能である。名詞の特徴によるパターン別に指導すれば、より効果的な言語習得が期待できそうである。

・佐々木俊雄（北京大学・院）：通過の三類型から見た“过”の統語的特徴について

拙稿（2013）「日本語における「空間的な通過のむすびつき」の三類型について」では、普遍的な認知方式によって通過概念を（１）範囲性を伴った空間の通過、（２）参照点を介する通過、（３）異領域へ移る通過、の三つに大別し、それぞれの類型において現代日本語がどのような言語表現上の特徴を有するかについて、主に連語論の視点から分析と考察を行った。本発表では、現代中国語の位置移動動詞“过”が有様移動の動詞、空間詞、趨向移動の動詞とどのようにフレーズを構成するかということを上記の普遍的な分類基準に基づいて類型毎にその統語的特徴をまとめ、併せて言語対照的な観点から日本語との表現の異同についても言及する。

◆中国支部例会

◇2014 年 5 月 18 日（日）広島大学

・柯惟惟（中原大・非）：台湾の新語データベース作成に向けて―新日系外来語を中心に―

台湾において大型新語データベースは早くも 1996 年に“新詞語料庫１”が，その翌年に“新詞語料庫２”が編纂されたが，経費や政策の関係で中止された。一方，中国では 2006 年から，『中国语言生活状况报告』が毎年発行されている。言語状況を知るには，新語調査が必要となる。しかし，台湾では中国のように重視されていない。そこで，個人で作成する必要が生じるが，その作業をしやすくするために，調査範囲を新語の一部に限定し，日本語由来の「新日系外来語」のデータベースを作成することにした。本稿では「新日系外来語」に関するデータベースを作るにあたって，「新日系外来語」の抽出方法，分類方法について検討したい。

・丁雷（島根大）：对日本大学生汉语声调发音能力的进一步探索

丁雷（2013）曾提出了：汉语声调的发音能力主要体现为“认调能力”和“拼调能力”的观点。同时，研究还发现学生的“认调能力”普遍弱于“拼调能力”，“拼调能力”训练没有引起教学自身足够的重视等现象。在丁雷（2013）的基础上，我们对岛根大学二外汉语教学的对象（N=120，课堂学习时间约为 80 小时）进行了特殊的声调发音测试。测试采取了“单调发音→双调发音→三调发音→四调发音”以及“四调发音→三调发音→双调发音→单调发音”结合的形式。通过这样的探索，我们对声调的发音能力(尤其是拼调能力)有了更进一步的认识（拼调的双模式：“聚合—分离模式”和“分离—聚合模式”），对声调的发音偏误也有了新的定义和分类。

・王欣（島根大学）・祝東平（吉林大学）：方位词“上/下”与“东西南北/前后左右”

汉语中表示基本方向的单音词中水平方向有两组：“东西南北”和“前后左右”；垂直方向只有一组：“上下”。水平方向与垂直方向这种表达的不对称，不是客观空间方向的不对称，而是主体认知的不对称。水平方向上，人们在大地上每个人有每个人的位置，并且每个人的朝向都是随时可以变化的，就是说没有常态的朝向。垂直方向上，所有人都在地面上——垂直位置相同，并且有常态朝向，正姿“头顶-脚底”与“天地”对应。因此，垂直方向一组的参照可以与水平方向的两组对应，当人或可以拟人化的物体正姿时，“头顶”方向是“上”，“脚底”方向是“下”。因此，从绝对意义上“天-地”是垂直方向的参照，也就是说“上—下”另一个义项是与“天-地”相同。

会議報告

■ 編集委員会

◆2014 年度第 1 回編集委員会（『中国語学』261 号）

日時：2014 年 3 月 19 日（水）13 時～17 時半
場所：東京大学駒場キャンパス 18 号館コラボレーションルーム２
出席者：小野秀樹（委員長）・石村広・佐々木勲人・沈力・中川裕三・中西裕樹・松江崇（以上委員）：［欠席］朱春躍（委員、海外出張のため）

【議事】

１．261号の依頼原稿および特集について

2013年度全国大会で基調講演をされた、中国社会科学院の沈家煊氏に論文寄稿の依頼をすることとした。また、第261号の特集論文は、2013年度全国大会でのワークショップ「指称の範疇化と『存在』の問題をめぐる考察―歴史文法の観点から―」の発表者4名（大西克也会員、松江崇会員、木津祐子会員、木村英樹会員）に執筆を依頼することとした。

２．『中国語学』261号の投稿論文について

投稿総数23篇。審査の結果、20篇を受理した。20篇の分野別内訳は：文字1、方言音韻1、歴史音韻1、方言文法2、語彙2、現代文法13。受理した20篇について、査読者各3名を決定した。査読報告書の提出期限を5月6日（火）とし、5月17日（土）の第2回編集委員会において採否決定を行なうこととした。

３．2014年度学会奨励賞の候補者について

260号の掲載論文から、2篇の予備候補を絞り、5月の第2回委員会で奨励賞候補を選出することとした。

４．テンプレートならびに執筆要領の修正・変更について

学会ウェブサイトの執筆要領の記載に誤りがあったので、訂正をお願いすることとした。また、テンプレートの改善に向けて意見交換を行なった。

◆2014 年度第２回編集委員会（『中国語学』261 号）

日時：2014 年 5 月 17 日（土）13 時～17 時半
場所：同志社大学大阪サテライト・オフィス
出席者：小野秀樹（委員長）、石村広、佐々木勲人、朱春躍、沈力、中川裕三、中西裕樹、松江崇（以上委員）

【報告事項】

１．261号の依頼原稿および特集について

依頼論文、特集ともに、執筆依頼に対して承諾の返事を受け取った旨、報告された。

【議事】

１．『中国語学』261 号投稿論文の採否について

受理した 20 篇の投稿論文について、査読結果に基づいて審議した結果、4 篇を要二次審査、16 篇を不採用とした。要二次審査の 4 篇は、6 月 30 日（月）必着で修正論文の提出を求め、編集委員会において二次審査を行ない、掲載の可否を最終決定することとした。

２．2014 年度学会奨励賞候補者について

2014 年 3 月 19 日の第 1 回編集委員会で 2 本に絞った候補論文について審議を行ない、奨励賞候補者を決定した。

３．『中国語学』投稿規定・執筆要領およびテンプレートの改訂について

第 261 号での投稿における使用状況に基づ

き、投稿用テンプレートに微修正を加えることとした。

４．査読体制の検討

262 号の編集に向けて、査読者名簿の確認を行ない、査読体制について意見交換した。

５．編集委員の後任候補について

任期満了の 4 名の委員の後任候補について、意見交換した。

■ 大会運営委員会

委員：竹越孝（委員長）、于康、遠藤雅裕、大西博子、木津祐子、更科慎一、朱継征、鈴木慎吾、丸尾誠、三木夏華、森宏子

［メール会議による審議］

A. 組織

（1）委員会内に審査・編成・渉外を扱う小グループを設けて役割を分担した。

B. 今年度の大会について

（1）第 64 回全国大会は大阪大学（豊中キャンパス）において 11 月 15 日（土）、16 日（日）に開催する。袁毓林氏（北京大学）による招待講演を予定している。

（2）研究発表応募規定、ポスターセッションガイドライン、予稿集作成要領等の応募関係書類を策定し、ウェブサイトに掲載した。応募期間は 5 月 30 日（金）より 6 月 16 日までである。

（3）ワークショップの企画応募期間を 4 月 1 日（火）から 4 月 30 日（水）までとしたところ、4 件の応募があり、審査の結果、今回は 4 つの部会により開催することとした。また、予稿集において企画者による趣旨説明を 1 ページ加えてもらうこととした。

（4）保育室の設置に対する要望が複数あったことから、今回の全国大会では開催校の協力を得て保育室を設置することとした。

C. 来年度以降の大会について

（1）ワークショップについては、海外研究者の招聘等で入念な準備が必要になるという理由から、これまで応募期間を通常の研究発表よりも早く設定していたが、将来的には研究発表と同じ募集期間とする方向で検討したい。

（2）保育室については、今年度の運営状況をふまえ、基本的には来年度以降も恒常的に設置する方向で体制を整備したい。

■ ウェブリソース委員会

委員：鈴木慎吾（委員長）、石崎博志、植屋高史、山崎直樹

・日常業務（ウェブサイトの更新、メールマガジンの配信など）

・業務担当：ウェブサイト管理（鈴木）、メールマガジン編集（石崎）、コンテンツ確認（植屋）、ウェブ管理サポート（山崎）

・昨秋より支部例会案内メールを全国の会員に配信。とくに問題は起こっていない。

■ 辞典編纂委員会

委員：平田昌司（委員長）、大西克也、小野秀樹、木津祐子、朱春躍、竹越孝、三宅登之、山崎直樹、楊凱栄

下記の日程で全体会議を開催：2014 年 1 月 13 日（ハートピア京都）、6 月 22 日（岩波書店）

科学研究費等により短時間アルバイトを雇用して原稿を整理。査読を経た原稿を本年夏から出版社に逐次送り、2016 年秋の刊行に向けた本格作業を開始する予定。

■ 2014 年度第 1 回理事会

日時：2014 年 5 月 18 日（日）14 時～17 時

場所：大学共同利用施設ユニティ特別会議室

出席者：太田斎（会長）、大西克也（副会長）、小野秀樹*、平井和之、遠藤光暁、木津祐子、楊凱栄（以上理事）；鈴木慎吾（ウェブリソース委員長）；平田昌司（辞典編纂委員長）；紺野達也、竹越孝**（以上幹事）
欠席者：古川裕（理事）
* 編集委員長を兼ねる
** 大会運営委員長を兼ねる

【報告事項】

1. 一般報告

1.1 役員・委員等の異動

・評議員交代
北海道支部：松江崇（北海道大）
→鈴木慶夏（釧路公立大）
東北支部：花登正宏（東京国際大）
→土屋育子（東北大）
関東支部：平井和之（日本大）
→加藤晴子（東京外国語大）
瀬戸口律子（大東文化大）
→佐々木勲人（筑波大）
関西支部：張黎（大阪産業大）
→于康（関西学院大）
岩本真理（大阪市立大）
→大岩本幸次（大阪市立大）

・支部代表交代
関東支部：平井和之（日本大）
→加藤晴子（東京外国語大）
関西支部：張黎（大阪産業大）
→下地早智子（神戸市外大）

1.2 会員動向（2014 年 4 月 1 日現在）

・会員数：

			増減
総会員数（賛助除く）		1202 名	+3
（内訳）	顧問	5 名	0
	名誉会員	25 名	0
	通常会員	779 名	−18
	ネット会員	283 名	+15
	団体会員	8 名	0
	海外会員	98 名	+6
賛助会員		24 社	0

※増減は昨年 10 月 1 日を基準とした数。

1.3 事務局の所在地について

［本部所在地］
〒651-2187　神戸市西区学園東町 9-1
神戸市外国語大学　中国学科内　日本中国語学会事務局
［会員関係］
〒602-8048　京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷株式会社　学会部内
担当：小畑香菜
Tel：075-415-3661　Fax：075-415-3662
E-mail：chilin@nacos.com

2. 支部例会関連

2.1 例会世話人交代

・北海道支部：松江崇（北海道大）
→鈴木慶夏（釧路公立大）
・関東支部：平井和之（日本大）
→町田茂（山梨大）
・関西支部：張黎（大阪産業大）
→下地早智子（神戸市外大）

2.2 今年度の例会開催予定

・北海道（鈴木慶夏支部代表）：　1 回
・関東（町田茂会員）：　4 回
・北陸（大滝幸子支部代表）：　1 回
・東海（丸尾誠会員）：　1 回
・関西（下地早智子支部代表）：　2 回
・中国（小川泰生会員）：　2 回
・九州（石汝傑支部代表）：　2 回

2.3 支部例会の広報について

・支部例会広報要領及び発表要旨作成要領の作成

・発表申請用のドメイン作成

3. 大会運営委員会報告

竹越委員長より以下の報告があった。

(1) 第 65 回全国大会開催校

東京大学（駒場キャンパス）に内定、開催校選出の大会運営委員は吉川雅之会員。開催時期は 2015 年 10 月末頃の予定、2015 年 4 月に正式決定の見込み。

(2) 第 64 回全国大会ワークショップ企画

今回は以下の 4 つの部会で行うことになった（発表タイトルはいずれも仮題)。

①日本語と中国語における話し手の見え方：「視点」に関する日中対照研究

企画：下地早智子会員、司会：井上優会員

発表：奥川育子「視点と事態把握：日中英対照」、下地早智子「時間表現に反映される視点の日中対照」、井上優「近視眼的/遠視眼的パースペクティブと文法」、杉村博文「passive：視点の対照研究の観点から」、（コメント）本多啓「「私」から見た中国語」

②方言データを活用した語法研究の可能性

企画・司会：竹越美奈子会員

発表：小嶋美由紀「中国語三人称代名詞の非指示化について」、西村英希「情態成分の文末後置現象：音声弱化と語気助詞化」、野田寛達「方言資料を基にした意味地図の作成：疑問代名詞の分析を例に」

③アジアの声調の諸相（亚洲声调面面观）

企画・司会：遠藤光暁会員

発表：八木堅二「山西東南部の二音節調ピッチ曲線」、中西裕樹「ショオ語の声調体系と「濁上帰去」」、鈴木博之「いわゆるチベット語カム方言における「声調」の音声学的特徴」、近藤美佳「若者の発音にみる現代ベトナム語北部方言の声調」

④汉语学习者语料库的建构与中介语的研究

企画・司会：望月圭子会員

発表：袁毓林「北京大学汉语学习者偏误语料库建构与中介语研究」、望月圭子・申亜敏「日本汉语学习者偏误语料库建构与中介语的研究」、于康「汉语学习者语料库的标注方法与自动识别标注系统」、砂岡和子・桂孟秋「日本学生汉语写作与口述能力的相关性研究」、陳浩然・張莉萍「台湾汉语学习者偏误语料库与中介语的研究」

(3) 保育室の設置について

今回の全国大会では開催校の協力を得て保育室を設置する。7 月末までにウェブサイト上で運営方法を告知し、電子メールによる事前申し込みを受け付ける。

(4) 次期委員長

互選により木津祐子委員が次期大会運営委員長に選出された。任期は第 64 回全国大会の翌日から 2 年間。

4. 編集委員会報告

小野委員長より以下の報告があった。

a. 『中国語学』261 号査読結果

受理した 20 篇の投稿論文について、査読結果に基づいて審議した結果、4 篇を要二次審査、16 篇を不採用とした。

b. 『中国語学』261 号特集について

2013 年度全国大会でのワークショップ「指称の範疇化と『存在』の問題をめぐる考察―歴史文法の観点から―」の発表者 4 名（大西克也会員、松江崇会員、木津祐子会員、木村英樹会員）に執筆を依頼。

c. 学会奨励賞候補者推薦について

2014 年 3 月 19 日の第 1 回編集委員会で 2 本に絞った候補論文について審議を行ない、奨励賞候補者を決定した。

d. テンプレートの改訂について

第 261 号での投稿における使用状況に基

づき、投稿用テンプレートに修正を加えることとした。

5. ウェブリソース委員会報告

鈴木委員長より以下の報告があった。

・委員の異動について

鈴木・石崎・山崎の各委員は留任、また植屋委員の任期はあと 1 年。

・例会の案内メールについて

これまで例会を開催する支部内にのみ案内メールが送られていたのを改め、2013 年秋より全会員に向けて送るようにした。

6. 辞典編纂委員会報告

平田委員長より、査読を経た原稿を本年夏から出版社に逐次送り、2016 年秋の刊行に向けた本格作業を開始する予定との報告があった。

【審議事項】

1. 学会奨励賞の授賞について

・受賞者を編集委員会原案どおり承認した。

2. 次期大会運営委員会について

・次期委員長に木津祐子氏が就任すること、および次期委員の人選（2014 年全国大会で 6 人の委員を選出）について大会運営委員会に一任することを承認した。

・第 65 回全国大会開催校について、内諾のあった東京大学（駒場キャンパス）に依頼することを承認した。

3. 名誉会員の推挙について

・推挙のお願いをニューズレターに掲載することを確認した。

4. 科研費申請について

・今年度は申請を見送り、今後の申請に向けた情報収集に努めることとした。

5. 会則・内規の整備について

・支部評議員等の位置づけ

支部および支部代表・評議員・例会世話人等の位置づけについて、継続審議とすることとした。なお、理事と評議員を兼任できないことを理事会として申し合わせた。

・役員定年の引き下げ

顧問を除く役員定年の年齢を引き下げることについて審議し、2014年の総会に会則の改定案を提出することを申し合わせた。

全国大会および例会開催のお知らせ

第 64 回全国大会開催のお知らせ

既に学会ウェブサイトでご案内しておりますように、今年度の大会は大阪大学豊中キャンパスにて 11 月 15 日（土）～16 日（日）に開催します。奮ってご参加下さい。なお研究発表の申込期間は終了しました。7 月中旬に採択者一覧が、7 月末に大会プログラムが学会ウェブサイト上にアップされます。（事務局）

今年度の例会実施予定

各支部の今後の例会実施予定は次のようになっています。

北海道支部：1 回（2015 年 3 月）

関東支部：4 回（6 月 21 日、7 月 19 日、9 月、12 月）

東海支部：1 回（11 月）

北陸支部：1 回（2015 年 2 月）
関西支部：2 回（6 月 28 日、12 月）
中国支部：1 回（10 月 19 日）
九州支部：2 回（7 月 12 日、12 月）

発表者、参会者ともに歓迎します。ただし、開催時期および回数は変更になることもありますのでご了承下さい。開催予定、申込締切、連絡方法などにつきましては学会ウェブサイトをご確認下さい。発表者の方には発表要旨（300 字以内）の事前提出をお願いしています。この要旨は学会ウェブサイト上の例会案内のページで紹介しています。なお、開催に関する詳細は、各支部の例会世話人までお問い合わせ下さい。（事務局）

事務局からのお願いとお知らせ

■ 名誉会員の推挙について

名誉会員の推挙は、9 月 30 日までに、推薦文を添えて事務局宛にお願いします。なお、名誉会員称号授与の条件は、年齢満 70 歳以上で継続して 20 年以上本会会員であった方のうち、本会の発展に功労のあった方となっており、評議会の審議を経た上で会員総会において決定されます。

■ 住所不明の会員

お知り合いの方がおられましたら、事務局までご連絡をお願いします。

王 艷霞、王 暁葵、王 蓓淳、郭 楊、黄 慧、
高 正姫、高 立偉、佐藤 直昭、蘇 雪蓮、
張 軼欧、趙 晶晶、張 志凌、張 馳、杜 暉、
永江 貴子、秦 耕司、李 穎麗、林 芝羽、
呉 睿純、王 彩芹、海 暁芳、郭 芝羽、
蔡 春花、熊 娟、鍾 叡逸、張 睿、趙 瑩瑛、
鄭 若曦、邱 林燕、別 紅櫻、森 博

■ 2014 年度会費納入のお願い

先にお送りした請求のご案内の通り、本年度会費（一般会員6,000円、ネット会員5,000円）を最寄りの郵便局からお振込下さい。

郵便振替　加入者名：日本中国語学会
口座番号：00980-6-282216

『中国語学』バックナンバーなどに記載されている旧口座には振り込まないようお願いします。なお、これまでの会費が未納の方は請求のご案内に記載していますので、一括してご入金下さい。記載請求金額が15,000円以上となっている場合、今年度ご入金いただけませんと、会則《会費納入に関る内規》により除籍となりますのでご注意下さい。除籍者名は冬のニューズレター上で公表されます。

■ 退会について

退会は会費納付が前提となっています。退会ご希望の方は必ず会費納付後の年度内にお申し出下さい。

■ 名簿改定について

今年は名簿改定の年に当たっています。情報に変更の生じた会員諸氏におかれましては、できるだけ e-naf を通して今年の 9 月 30 日までに正確な情報を入力して下さいますようお願いします。

■ 予稿集の販売

過去の大会予稿集は好文出版にてお求めになれます。第61回までは1,500円、それ以降は2,000円となっています。詳しくは学会ウェブサイトをご覧下さい。在庫につきましては好文出版（order@kohbun.co.jp）に直接お問い合わせ下さい。

■ 事務局の連絡先　2016 年 3 月まで

事務局への郵便物は、

〒651-2187
神戸市西区学園東町 9-1
神戸市外国語大学中国学科内
日本中国語学会事務局宛

へお願いします。また各種お問い合わせは、学会ウェブサイト（http://www.chilin.jp/）内の「お問い合わせ」ページをご利用ください。

日本中国語学会々報　2014 年春季
（年二回発行）
発行者：日本中国語学会事務局
〒651-2187
神戸市西区学園東町 9-1
神戸市外国語大学
中国学科内
E-mail: jimukyok@chilin.jp
URL: http://www.chilin.jp/
発行日：2014 年 6 月 25 日